東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

The University of Tokyo Library System Bulletin
図書館の窓 増刊

New Library Project

2016. Spring

特集

生まれ変わる「知」の拠点

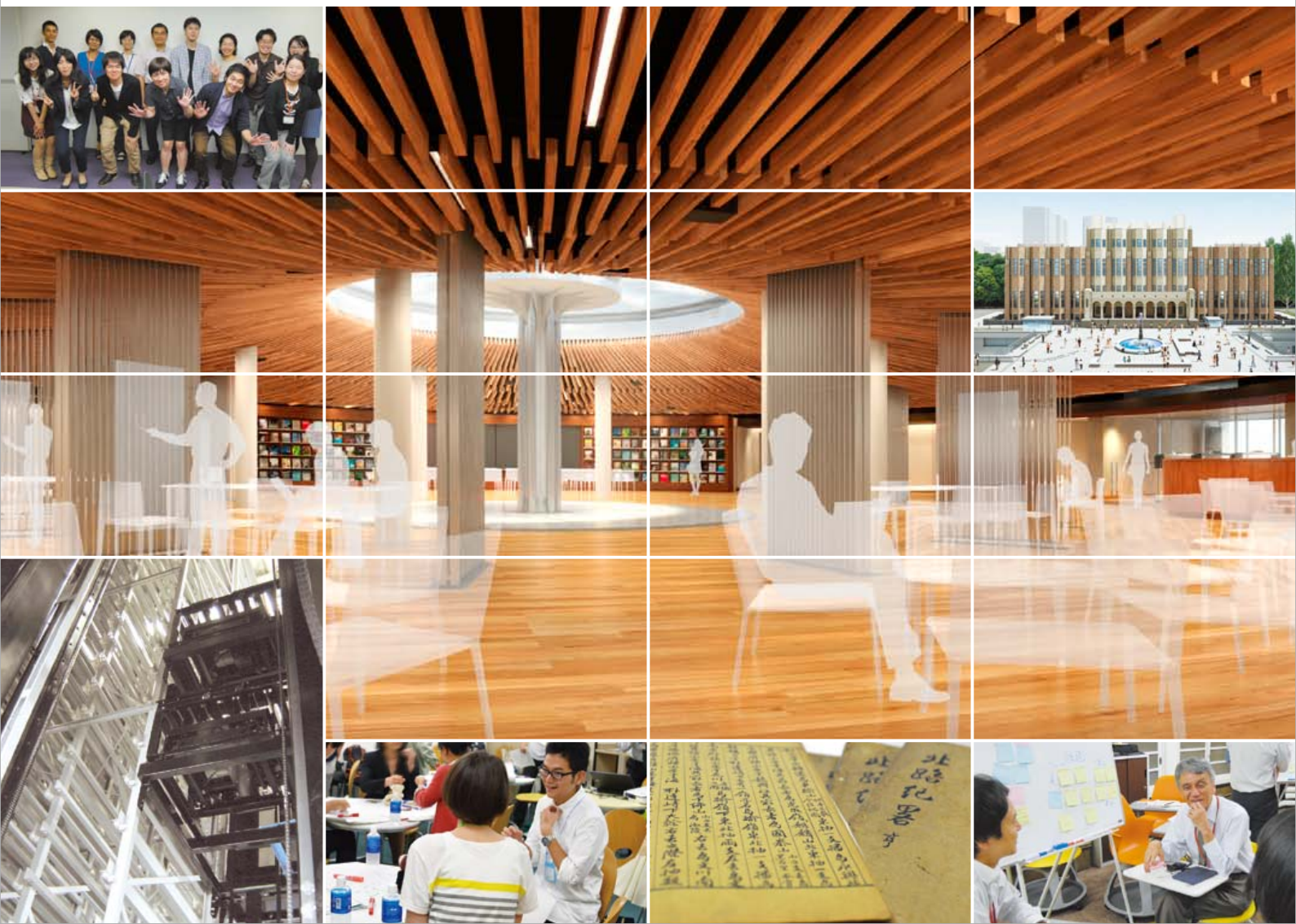
東京大学 新図書館計画のすべて

東大生が聞く!
新図書館でどうなる知の未来
館長・副館長インタビュー

歴史の中の総合図書館

新図書館が目指す5つのコト

マンガで知ろう!
あなたのための図書館サービス



ACADEMIC COMMONS 新図書館

contents

特集
生まれ変わる「知」の拠点
東京大学新図書館計画のすべて

4 これが完成予想図だ
東京大学の学習・教育・研究の新たな拠点！

6 ライブラリープラザ（仮称）
研究と学びをつなぐ学術交流の場

8 収蔵冊数約300万冊！
新館地下に巨大自動化書庫

10 探検！！
ACS と行く総合図書館

12 歴史の中の総合図書館

14 東大生が聞く！
新図書館でどうなる知の未来　館長・副館長インタビュー

16 新図書館が目指す5つのコト

18 マンガで知ろう！
あなたのための図書館サービス

『図書館の窓増刊 New Library Project』をお届けします。

『図書館の窓』は東京大学附属図書館の提供するサービスやイベントなどの情報をお届けするニュースレターです。この冊子は、その増刊号として、現在附属図書館が進めている一大プロジェクト、「新図書館計画」をご紹介しています。

この冊子が誕生することになったきっかけは、新図書館計画をサポートしてくれている学生ボランティア組織「アカデミックコモンズサポーター（ACS）」メンバーの一言。「もっと、僕たち学生に新図書館計画のことをわかりやすく伝えてほしい」そんな一言から始まった冊子づくり。「わかりやすく、気軽に読める一冊」を目標に、ACSのみなさんとともにつくりあげました。

この冊子は、2015年3月に刊行しましたが大変なご好評をいただきました。そこで、このたび内容を一部改訂し、第2版として刊行することとなりました。

ご一読いただき、「新図書館計画」のことを、そして附属図書館が変わりつつあることを、少しでも感じていただけると幸いです。

東京大学附属図書館
新図書館計画推進室

ACSとは？

アカデミックコモンズサポーター(ACS) は、東京大学附属図書館の未来の姿を提案する学生ボランティア組織です。ACS については 15 ページで詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

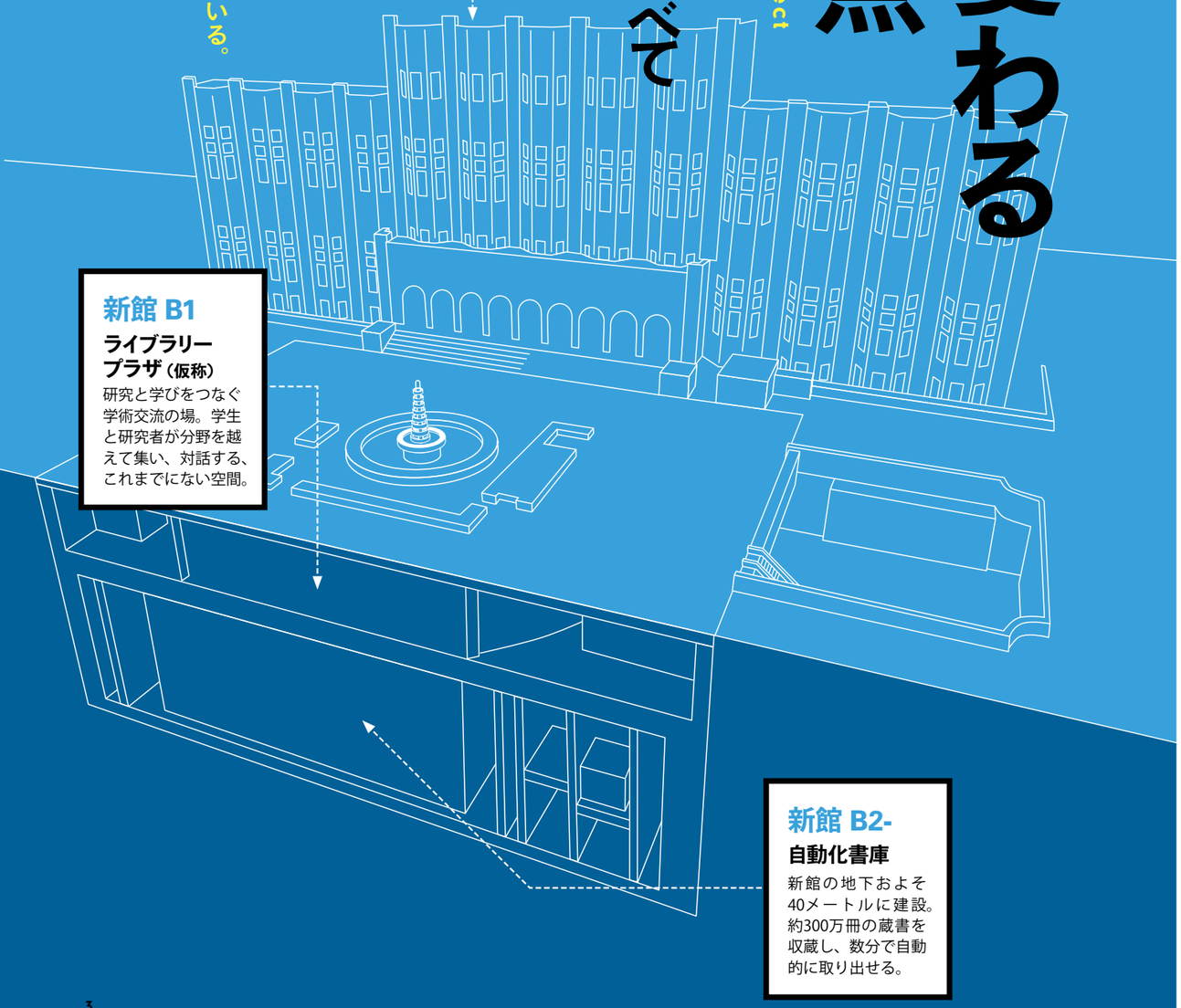
特集

生まれ変わる「知」の拠点

All about the New Library Project

東京大学 新図書館計画のすべて

本特集では、新図書館計画によって、附属図書館に加わる新たな設備や機能、その目的や意義、理念など、この一大プロジェクトのすべてを紹介している。本特集を通じ、附属図書館が、東京大学の「知」の拠点として、今まさに生まれ変わろうとしている、その息吹を感じとってほしい。



これが完成予想図だ

東京大学の学習・教育・研究の新たな拠点！

新図書館計画では、本郷キャンパスにある総合図書館の建物（本館）の全面改修に加え、図書館前の広場地下に新たな建物（新館）を建設し、これからの学習・教育・研究のための新たな拠点を形成する。工事はすでに始まっており、2017 年 5 月には新館が、2019 年には本館の改修が完了する予定だ。

生まれ変わる「知」の拠点 東京大学附属図書館の進化

東京大学にはキャンパスごとの拠点図書館と、学部や研究所ごとの部局図書館・室があり、その数は全部で35。これらが「東京大学附属図書館」という名の下に有機的に結びつき、学生の学習や教員の教育・研究をサポートしている。附属図書館全体の蔵書数は９４０万冊を超え、基本書から専門書、さらには国宝級の貴重書までを備えた、東京大学の知の拠点となっている。

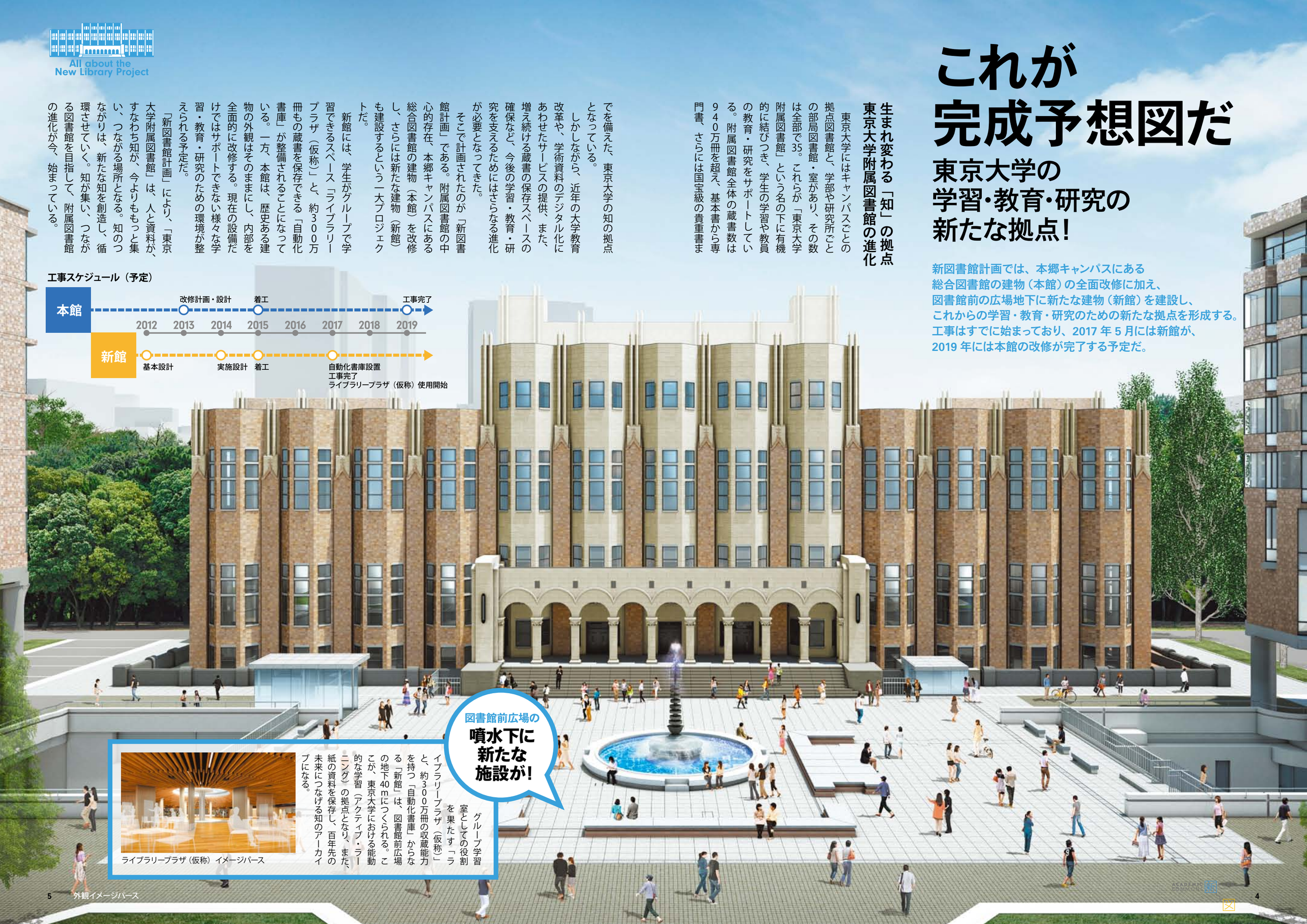
しかしながら、近年の大学教育改革や、学術資料のデジタル化にあわせたサービスの提供、また、増え続ける蔵書の保存スペースの確保など、今後の学習・教育・研究を支えるためにはさらなる進化が必要となってきた。

そこで計画されたのが「新図書館計画」である。附属図書館の中心的存在、本郷キャンパスにある総合図書館の建物（本館）を改修し、さらには新たな建物（新館）も建設するという一大プロジェクトだ。

新館には、学生がグループで学習できるスペース「ライブラリープラザ（仮称）」と、約３００万冊もの蔵書を保存できる「自動化書庫」が整備されることになっている。一方、本館は、歴史ある建物の外観はそのままにし、内部を全面的に改修する。現在の設備だけではサポートできない様々な学習・教育・研究のための環境が整えられる予定だ。

「新図書館計画」により、「東京大学附属図書館」は、人と資料が、すなわち知が、今よりももっと集い、つながる場所となる。知のつながりは、新たな知を創造し、循環させていく。知が集い、つながる図書館を目指して、附属図書館の進化が今、始まっている。

工事スケジュール（予定）



外観イメージパース

図書館前広場の噴水下に新たな施設が！

グループ学習室としての役割を果たす「ライブラリープラザ（仮称）」と、約３００万冊の収蔵能力を持つ「自動化書庫」からなる「新館」は、図書館前広場の地下40ｍにつくられる。ここが、東京大学における能動的な学習（アクティブ・ラーニング）の拠点となり、また、紙の資料を保存し、百年先の未来につなげる知のアーカイブになる。

ライブラリープラザ（仮称）イメージパース

「ライブラリープラザ（仮称）」イメージパース。
広さ約 800㎡、収容能力 200 名程度の円形空間。

B1 Library Plaza

ライブラリープラザ（仮称）

研究と学びをつなぐ学術交流の場

2017年度運用開始予定の「ライブラリープラザ(仮称)」は知の円形劇場。学生と研究者が集い、様々なパフォーマンスや対話が行われる、学術交流の舞台である。分野の異なる人々が集い、気軽に議論する、これまでにない空間が生まれる。

東大生の新しい学びの場

大学での学びを、複雑化した社会で活用できる知につなげるには、受動的な知識の習得だけでなく、議論や発表などの能動的な学習が重要となる。東京大学においても総合的な教育改革の中で、主体的学びの促進を掲げている。多様な学習スタイルに対応できる場所や、多様な人々が刺激を与え合う環境が、教室外の学びの場である図書館にも期待されるようになった。

新館地下1階に生まれる「ライブラリープラザ（仮称）」は、学生と研究者が議論し、研究成果を発表する、多様なシーンで利用できる空間だ。仕切りのない円形スペースで、様々な学部から集う人々の活動が何気なく目に入り、話し声も聞こえる、刺激的な「知の円形劇場」である。

学びを促進するため、設計にはどんな工夫がされているか。設計担当の川添善行准教授（生産技術研究所）に話を聞いた。

「ライブラリープラザは円形のため見通しがよく、目に入る様々な活動から刺激を受けられます。真上にある図書館前広場の噴水底が天窓の役割をはたしており、ここから太陽の光が地下1階の床面に広がっていく。円の中心に向かって上昇する天井デザインが、「知の一体性」をも表現しています。

音環境も工夫しました。しんとしていると話しにくく、他グループの声がはっきり聞こえると気になる。議論しやすい「心地のよいざわめき」はどうすればつくり出せるか。その仕掛けは天井にあります。天井は格子状の木でつくられ、裏に吸音材があり、これが人々の話し声を適度に吸収し散らすのです」

昔の大学教育では、本の中の答えを学生が効率的に吸収することが重視されていた。図書館建築の主題は、壁の本棚をいかに美しく見せるかだったという。ライブラリープラザは、答えのない問いを皆で議論する場となるようつくられている。「答えのある時代の壁の図書館から、皆で議論する天井の図書館へ」と川添先生が表現するように、これまでの図書館とは異なる空間になるだろう。

さらに、ライブラリープラザは研究と学びをつなぐ場となることが企図されている。異分野間の研究者の交流や、研究者と学生の出会いが、発見や創造、そして「学び」につながっていくはずだ。

こんなことができる！

ライブラリープラザ（仮称）で

Point 1 グループワーク

自主的な勉強会や研究会

仲間と研究会を立ち上げた。今日はミーティング。テーブルと椅子は、自由に組み合わせができるから、自分たちのスタイルで使える。ライブラリープラザ（仮称）では、いつもどこかでディスカッションが起きている。周りに刺激されて、自分たちの議論も活性化。みんなで話せば一人のときよりも多くの発見があるだろう。

ミニレクチャールームオープニングイベント
（2015 年 9 月開催）

Point 2 学術イベント

研究成果の発信と異分野交流

学会で発表するだけでなく、異分野の人とも話してみたい。「アカデミック・ステージ（仮称）」では、研究成果をプレゼンしたり、トークセッションで、分野の壁を越えて議論したりできる。学生と研究者も入り混じる。ふとした出会いから、新たなテーマが見つかるかもしれない。

研究成果のプレゼンテーション（写真はイメージ）

Point 3 「ブックフォレスト」

新たな本との出会い

知っている本なら東大OPACで探すことができるけれど、今日は知らない本に出会いたい。「ブックフォレスト」は、本との偶然の出会いを生み出す企画展示コーナー。そこで出会うのは、答えが見つけられずにいたあの問題のヒントとなる本かもしれない。イベントの後に訪れれば、学びをさらに深めてくれるだろう。

企画展示「知」が創る「平和」－藤原帰一と見る世界
（2014 年 6-8 月開催）

「ライブラリープラザ（仮称）」のゾーニング案イメージ模型。学習・研究活動の様々な場面で利用できる。

新館地下に巨大自動化書庫

収蔵冊数 約300万冊！

B2 Automated Storage and Retrieval System

自動化書庫

東京大学附属図書館が所蔵している膨大な資料を後世に伝えていくために、新館地下に自動化書庫がつくられる。その収蔵冊数は約300万冊と国内最大級の規模だ。資料の永年保存は、学術機関だからこそできることでもある。東京大学の「知」のアーカイブを、そして新たな「知」との出会いの場を支える役割を担う。

「知」の集中と「知」の循環 自動化書庫が担う役割

およそ940万冊。東京大学附属図書館の蔵書数だ。[1] 蔵書は毎年約10万冊のペースで増え続けている。過去から積み重ねられてきた資料を、今、研究・学習支援に提供し、また未来に遺さねばならない。資料は日々増え続けるが、それを保存するスペースは限られている。そのスペースが足りなくなっているのが現状だ。

東京大学には、柏図書館に100万冊収蔵可能な自動化書庫があり、全学から自然科学系雑誌のバックナンバーを集約して保存している。これにより、自然科学系の部局図書館・室では、ある程度スペースが確保される。しかし、総合図書館や人文社会科学系の部局図書館・室では、スペースの確保に苦しんでいる。

新館地下につくられる自動化書庫には、本館4階に設置されるアジア研究図書館の蔵書の一部のほか、人文社会科学系雑誌のバックナンバーなども収められる予定だ。約300万冊収蔵可能な書庫に、総合図書館や人文社会科学系の部局図書館・室の蔵書の一部を移せば、それぞれに余裕が生まれる。キャンパス拠点図書館である総合図書館では学習支援を中心に、部局図書館・室では研究支援を中心に、より力を注げるようになる。

では、自動化書庫とはどういうものなのか。書庫の中の巨大な棚に資料の入ったコンテナが収められている。コンテナを出し入れする装置をスタッカークレーンと言う。OPACなどからの出庫指示を受け、スタッカークレーンが目的の資料が入ったコンテナを取り出し、搬送路に乗せる。コンテナは自動的に出庫口へ運ばれてくる。

気になるのは使い勝手だろう。柏図書館の自動化書庫を例に見てみよう。

図書館内のOPAC端末で資料を検索し、検索結果画面の「出庫指示」ボタンをクリックする。5分前後（早ければ3分！）で資料を受け取ることができる。ブラウジングはできないが、見たい資料や部分が決まっていれば、自分で探しに行くことなく数分で資料を取り出せる。自分で書庫に資料を取りに行くよりも楽だし、時間も早いかもしれない。

使い勝手、とは違うが、ひとつ付け加えたい。それは「安全」だ。自動化書庫は震度7クラスの地震にも耐える性能を持ち資料を安全に保管できる。通常、人が立ち入らないので、万一資料が落下しても人的被害がない。

自動化書庫は「所蔵する人類の貴重な知的遺産を責任を持って次の世代に伝える」（東京大学図書館憲章）ことを実現し、東京大学の「知のアーカイブ」を支える役割を担う。また、知を集中させることで人が集まり、図書館が新たな出会いの場になる。出会いから新たな知が生み出されるという循環の土台となることを目指す。

（1）平成27年3月31日現在

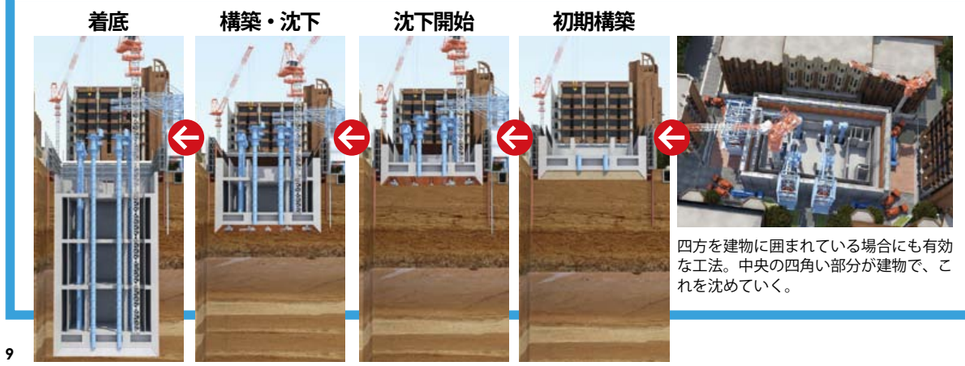
出庫口。コンテナに乗ってここに資料が到着する。（写真は柏図書館のもの）

柏図書館自動化書庫の内部。天井まである棚に収められたコンテナをスタッカークレーンが取り出す。中央の通路をスタッカークレーンが移動する。

Column 広場の類まれなる工事

ニューマチックケーソン工法を使って

新館は広場の地下をおよそ40m掘ってつくられる。その高さは12～13階建ての建物と同じだ。地下に建物をつくるため地面を掘るのだが、40mを一気に掘ることはとてもむずかしい。そこで、まず建物を地上でつくり、それを重さで沈めていくという方法をとる。建物の床下に最初は人が、最終的にはロボットが入り、ロボットを地上で操作し、建物を沈めていく。この土木技術は「ニューマチックケーソン工法」と言い、19世紀にはヨーロッパやアメリカで用いられ、日本では明治時代に取り入れられている。マンハッタンのブルックリン橋や永代橋の基礎にも使われている。このような土木技術を建築空間で使うという類まれな工事が広場で行われているのだ。



四方を建物に囲まれている場合にも有効な工法。中央の四角い部分が建物で、これを沈めていく。

F1-3 Main Building 本館

探検!!

ACSと行く総合図書館

新図書館計画により、
全面改修が予定されている総合図書館。
その建物は 1928 年に建設されており、90 年近い歴史を誇る。
そんな歴史と伝統の詰まった総合図書館の魅力は、
膨大な蔵書だけではない。
知る人ぞ知る総合図書館の見どころを紹介する。

Check!
新図書館計画学生ボランティア「アカデミックコモンズサポーター（ACS）」の詳細については、15ページをご覧ください。

外観

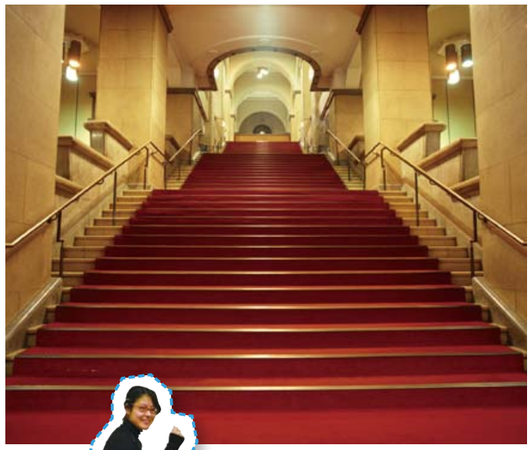
本が並んでる!? “内田ゴシック”の真髄

現在の総合図書館は、関東大震災により廃墟と化した「旧図書館」にかわって建設されたものだ。安田講堂と同じく、建設当時工学部教授であった内田祥三（後の東京帝国大学第14代総長）によって設計されている。入口のアーチ、スクラッチタイルの壁面、尖塔型の柱など「内田ゴシック」と呼ばれる特徴がふんだんに盛り込まれており、正面から見るとまるで本棚に本が並んでいるかのよう。改修後も本棚の中に入り込む感覚は維持される予定だ。

大階段

3 階まで吹き抜け！ 荘厳な大階段

正面玄関の大きな扉をくぐると、目の前に出現するのが3階まで続くこの大階段。大理石と敷き詰められた赤絨毯の圧倒的な迫力は、まさに東京大学の図書館を代表する見どころといえる。階段上部の吹き抜けが3階のホールと融合し、建物内の縦のつながりを感じさせる重要な空間だ。



階段にアンモナイト発見！

All about the New Library Project

1 階洋雑誌閲覧室

図書館の風格を閉じこめた一室

建設当時、関東大震災からの復興を記念して「記念室」と名づけられていた。後に「貴賓室」とも呼ばれ、皇族をはじめとする来客用の部屋として使用された。入り口にある「南葵文庫」の額は徳川慶喜の自筆のもの。総合図書館の中でも特に歴史性を味わえるこの一室、最近では講演会などのイベントにも活用されている。総合図書館の過去と未来とをつなぐ象徴として、比類のない役割を担っている。

細部のデザインにも注目！

3 階ホール

見上げればそこには花咲くアーチ

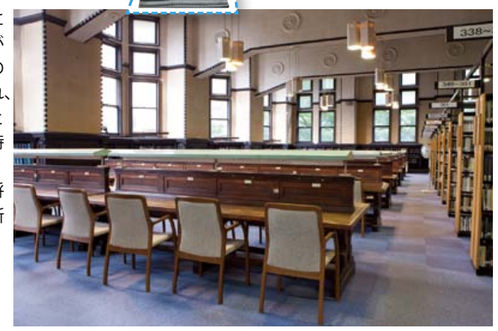
大階段を上りきると広大な空間にたどり着く。花々を象った彫刻の施された天井や柱、壁面のメダリオンやレリーフなどが目を引き、その重厚な雰囲気は美術館や博物館を思わせる。しかし、創建90年という時間の経過に伴い、老朽化のため天井表面が剥離する可能性があることも明らかになった。建物の安全性を高めることも、改修の目的のひとつである。

360度見どころです

3 階閲覧室

いつの時代も、学びの場として

館内で最も広い閲覧室で、東西に長い空間に建設当時から残る長机が並んでいる。ホールと同じく天井の梁には意匠を凝らした装飾が施され、奥行きやゆとりを感じられる空間となっている。静かに本と向き合う時間を過ごす場所として、昔から長く親しまれてきた。現在の、そして将来の東大生にも、思い出に残る場所として受け継いでいきたい。



座っているだけで身が引き締まります

Column

本館改修後の展望

総合図書館の改修。それは図書館のもつ歴史性を継承しつつ、将来の利用にふさわしい機能を付加するという挑戦的な取り組みだ。

このページで紹介されている外観や歴史的価値の高い部屋などは、それを保全し将来へ継承していくべきエリアである。これまでにも、戦時中の金属供出により失われた玄関ポーチ外灯の復元（2009年12月）など図書館の歴史性継承の取り組みは着実に進められており、安田講堂の改修と並び大きな意義を持つプロジェクトとなっている。

その一方で、図書館に新たな機能を付加する改修も行われる。例えば2階には、従来にはない「メディアを使い/生み出す場」を提供する「メディアラボ（仮称）」が設けられる。また、4階は「アジア研究図書館」のフロアに生まれ変わる。アジア研究に関する国内外の第一級の資料を収集・整理し、世界の研究者が集う国際的な拠点となることを目指している。

もちろん静謐な閲覧空間は総合図書館の重要な機能のひとつであり、今後も受け継がれていく。伝統を尊重しながら新たな機能を取り入れていくことで、より多様な学びのスタイルを支援できる図書館となることだろう。

本館改修イメージ検討のためのCGより

歴史の中の総合図書館

総合図書館は、
1877（明治 10）年の東京大学開学以来、
幾多の変遷を経て現在に至っている。
この図書館は、これまで多くの人物に支えられ、
時には歴史の表舞台に立つこともあった。
ここでは、総合図書館の歴史について、
エピソードを交えて紹介してみたい。

Episode 関東大震災以前

小説『三四郎』の中の図書館

1877（明治10）年の東京大学の創設時に東京大学図書館は設置された。しかし、このときは図書館という組織はあるものの、独立した建物はなかった。独立した図書館が完成するのが、図書館設置から15年後の1892（明治25）年である。この頃の図書館の様子は、ご存知夏目漱石の小説『三四郎』（1908）に登場している。

―三四郎は始めて図書館に這入る事を知った。其翌日から三四郎は四十時間の講義を殆んど半分に減して仕舞った。さうして図書館に這入った。広く、長く、天井が高く、左右に窓の沢山ある建物であった。【『漱石全集：第五巻』（1994）から引用】

漱石は、他に『入社の辞』（1907）でも図書館について触れている。興味があればぜひご覧いただきたい。

東京帝国大学図書館時代の閲覧室

Episode 太平洋戦争時

秘密裏に進んだ終戦工作の裏舞台

戦時中の図書館は、南原繁法学部教授（後の第15代東大総長）たちの「終戦工作」において記述が確認できる。

―この終戦工作はまったく法学部の同志だけでやりました。（中略）もちろんきわめて秘密を要することですから、潜行してやらなければならない。（中略）ひそかに大学の中央図書館の二階の貴賓室に集まり、情報をもちよっては、それを分析し（後略）。【『聞き書 南原繁回顧録』（1989）から引用】

中央図書館が総合図書館のことか、2階に貴賓室があったかなど定かでないが、歴史の裏舞台で図書館が使用されていたようだ。終戦工作は結果として実を結ばなかった。しかし、当時の要人たちに影響を与え、その意見は天皇のもとまで届いていたようである。【参考資料『天皇と東大：下巻』（2005）】

南原繁教授肖像
写真出典：『東京大学百年史』通史二

Episode 東大紛争時

東大紛争による図書館閉鎖

戦後の図書館は、東大紛争の舞台として登場する。

―東大全共闘は、（中略）全学封鎖に邁進する方針を決定した。この全学封鎖方針の第一歩として選ばれたのは、本郷の総合図書館だった。東大闘争渦中でも、研究や司法試験勉強にいそしむ教授や学生は多く、総合図書館にはそうした人々が集まっていた。（中略）総合図書館は闘争の進展とは無縁に、ただひたすら『学問』にはげむ点取虫の最大の巣窟となっていた。【『若者たちの叛乱とその背景：1968上巻』（2009）から引用】

結果的に総合図書館は1968（昭和43）年11月から翌年2月まで閉鎖されたのであった。

封鎖された総合図書館前　写真提供：共同通信社

Episode 1980年代

図書館前広場に描かれた「曼荼羅」

総合図書館前の広場が文学部3号館と法学部4号館に囲まれた空間になったのは、1987（昭和62）年である。ふたつの建物の設計者である、大谷幸夫工学部名誉教授がこのとき総合図書館前広場に描いた「曼荼羅」図についてご紹介したい。

―広場には色のついた石材などのモザイクで幾何学模様が描かれている。周囲の建物に上り、上から見下ろすと舞台上に舞った舞姫の軌跡のようにも見えるが、この広場に大学生としての短い記憶を残し戻らぬ人となった学徒出陣の先輩たちのことを想い、大谷が供養のため描いた「曼荼羅」である。【「東京大学本郷キャンパス案内」（2005）から引用】

新館建設後の総合図書館前広場は、これら歴史の記憶に配慮し、伝統と新しさを併せた空間となるよう計画がされている。

色付きの石でモザイクされた「曼荼羅」
写真出典：『東京大学本郷キャンパス案内』

新館建設中の図書館

新館建設前の図書館

1955（昭和30）年頃の図書館

1928（昭和3）年に再建された図書館

再建中の図書館

廃墟となった図書館

1909（明治42）年頃の旧図書館

2016　2000　1990　1980　1970　1969　1960　1950　1945　1940　1930　1923　1920　1910

（平成28年）
現在新図書館計画進行中

（昭和44年）
東大安田講堂事件　大学紛争

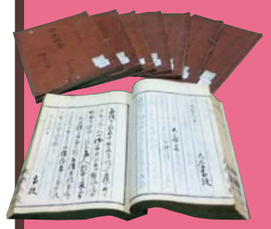
（昭和20年）
終戦

（大正12年）関東大震災

Episode 最近

大学史関係資料が重要文化財に

『東京帝國大學五十年史』（1932）編纂にあたって収集され、総合図書館と大学文書館で所蔵している資料が、「東京大学史関係資料」として重要文化財に指定された。これは大学史の歴史資料では初めてのことである。江戸時代末期、東京大学の前史となる、太政官の下の「大学校」時代にはじまり、1877（明治10）年に創設された東京大学から帝国大学へ、東京帝国大学を経て新制の東京大学誕生に至るまでの公文書類が含まれている。


重要文化財に指定された
大学史関係資料

Episode 関東大震災からの復興【図書館資料編】

国内外から多くの資料が寄贈

関東大震災での図書館の全焼により、所蔵図書は瞬時に灰塵と帰した。しかし、幸いにも、多数の貴重な図書の寄贈の申し出があった。国内からの寄贈で特筆すべきものは、当時侯爵であった徳川家からの「南葵文庫」である。質量ともに総合図書館蔵書の根幹をなすものとなっている。

「鴎外文庫」は森鴎外の蔵書で、こちらも震災からの復興のため1926（大正15）年に遺族から寄贈された。鴎外自筆の写本、書き入れ本も多い。

「青洲文庫」は甲州の素封家渡辺家の寿、信（青洲）、沢次郎の三代にわたる旧蔵書を信の子、沢次郎から購入したものである。個人の蔵書としては質量ともにすぐれたもので、震災後の復興の礎のひとつとなった。「青洲文庫」の額は、初代内閣総理大臣伊藤博文の書である。伊藤博文と青洲が将棋で賭けをして、負けた博文が自筆したとの言い伝えがある。

大量の寄贈図書の整理に追われる司書

伊藤博文自筆の「青洲文庫」の額

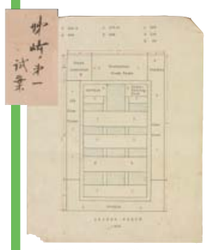
上／森鴎外蔵書印
下／自筆サイン

Episode 関東大震災からの復興【建物編】

激論！図書館再建計画案

焼失した図書館については、1924（大正13）年に図書館再建と図書の復興のためにとジョン・ロックフェラー・ジュニア氏より400万円の寄付の申し出が寄せられた。

図書館再建の計画案については、立案した内田祥三（当時営繕課長兼図書館建築部長）と姉崎図書館長の間で激論が展開されたと言われている。内田祥三氏はキャンパス構想全体との整合性を唱え、姉崎館長は図書館としての機能を重視し設計の変更を主張。現在の建物を見ると、内田祥三氏の案に近いものに落ち着いたと推測できる。完成は1928（昭和3）年で同年12月に竣工式を迎えた。


再建後の図書館とまったく異なる姉崎館長の設計案

Episode 関東大震災

震災で炎上した図書館は映画のシーンにも

1923（大正12）年9月1日の関東大震災によって、レンガ造りの旧図書館は炎上してしまった。この旧図書館炎上のシーンは映画『風立ちぬ』（2013、宮崎駿監督）で描かれている。ご覧になった方もいるのではないだろうか。写真によく似たシーンが描かれているので、気になる方はチェックしてみてほしい。

また、現在工事中の新館建設に際して行われた、総合図書館前広場での埋蔵文化財調査で出土した赤いレンガは、関東大震災で焼失した旧図書館の基礎であった。このレンガは何らかの形で再利用することが検討されている。

炎上する図書館

Episode 江戸時代

図書館建設地は溶姫御殿跡地

江戸時代、東京大学の敷地は元加賀藩の上屋敷であった。1827（文政10）年には、将軍家より嫁いだ溶姫のために赤門が建設されている。この赤門を正門としていた邸宅が溶姫御殿だ。総合図書館前広場で行われている新館建設現場は、ちょうど溶姫御殿の跡地である。新館建設工事のための発掘調査では、食器類や、かんざしなどの装飾品が出土している。

出土した埋蔵物

東大生が聞く！

新図書館でどうなる知の未来

館長・副館長インタビュー

「新図書館計画」によって、東大の知のあり方はどう変わっていくのだろうか？
学生による図書館ボランティア組織「アカデミックコモンズサポーター（ACS）」が、館長の久留島典子教授、副館長の堀浩一教授に聞いた。

久留島 典子（くるしま のりこ）
東京大学附属図書館長、史料編纂所教授

堀 浩一（ほり こういち）
東京大学附属図書館副館長、工学系研究科教授

新図書館では何が起こるのか

——これまでの図書館は、大部分の東大生にとっては、本を閲覧して勉強するというだけの場所でした。これから総合図書館の地下には、議論やグループワークをすることができる新しい空間がつくられようとしていますが、そもそも「新図書館」はいったい何を目指して、そこではどのようなことが起こってほしいと考えていますか？

久留島　新図書館は、人や知が「集う」「結ぶ」「開く」ことによって、新たな知が生まれる場だと捉えています。

例えば、ライブラリープラザのような場所に人々が「集う」、知の集積体である本と人がそこで「結ぶ」、さらにそこにいない人たちにも知を「開く」ということが起こっていくと思うんですね。開くというのは空間的なことだけではなく、時系列についても言えて、世代と世代をつなぐことにもなります。図書館という場に集まった人たちが、本を媒介に融合して何かが起こる。それを発信することによって、また新たに知の集積体に加わってゆく。知はこうして積み重ねられ、世代を超えて存在していきます。図書館とは、空間的に異なるものをつなぎ、過去・現在・未来をつなぐ機能を持つ、そういうところと考えています。

堀　久留島先生の考えとまったく同じで、別の言葉で言うならば「文理融合の拠点」としての新図書館、「価値創造の拠点」としての新図書館になると思います。東京大学は総合大学ですが、文系と理系、分野を超えた人たちが自然に出会って、何かが生まれる可能性がある場所は、じつは、学内には図書館しかないんですね。しかもそこには豊富な情報資産がある。新しい知識というのは、過去に蓄積された知識をいったんバラバラにして、新しい文脈で組み替えることによって生まれるものですけれど、そういった知識を生み出す循環が起こっていくような場所として、図書館が有効に機能するようにしたいですね。

知へのアクセスを保証する

——図書館の利用者が最も関心があるのは、自分が探したい資料にいかにアクセスできるかということだと思います。研究において必須である「資料との出会い」という点では、どのような工夫を考えていますか？

堀　学術資産へのアクセスは、まさに図書館の中核的な機能のひとつです。「リソースディスカバリ」がひとつのキーワードになっていて、世界中で様々な試みが始まっているけれど、僕が人工知能の専門家として言えることは、単に検索技術を工夫するだけではうまくいかないということ。中身のリソースをいかに組織化するか、探しやすいように付加情報を整備しておくかということの方が大事。例えば東大の中でも、図書館の本だけではなくて、いろいろな部局にいろいろな学術資産があるけれど、それらが必ずしも把握されていないんですよね。研究室の片隅に置かれていたり、埋もれていたりする貴重な資料がたくさんあるらしい。東大が持っている学術資産にきちんとアクセスできるようにするためには、まずは、一度きちんと調べ上げて、埋もれた資料を見つけ出したいと思っています。こういった整理こそ、図書館が得意なことだと思うので。資料の関連付けの仕方も、これまでのようなひとつの体系で分類するのではなくて、いろいろな文脈でいろいろな関係が見えるように複数通りのタグ付けをするとか、そういう柔軟に検索できる仕組みを取り入れたいです。

久留島　図書館が扱う学術情報は、書庫としての物理的な情報空間から、ネット上の電子的な情報空間にまで広がっています。紙の本であれば、分類して棚に並べておけば、利用者が自分で手に取って本と出会うことができます。一方で電子的な資料は関連資料が見つけづらい側面があり、電子化されたものだからこその、資料と出会うための仕掛けが必要になります。本と人を結ぶ媒介者である図書館には、電子化された資料にアクセスしやすくするために、学習や研究で役に立つ情報を精査して発信するという役割が求められると思います。

それからもう一点、私は日本の中世史の研究をしており、物としての史料を保存することはとても重要だと考えています。なぜならそれぞれがオリジナルなものだからです。でも、後世に貴重な資料とみなされるかどうかは、現在の価値観では判断できないんです。そういう観点から言うと、図書や資料は体系的に残していかなければ、貴重な学術資産がいつの間にか、誰も知らないうちに抜け落ちてなくなってしまいます。今後は物としての本を体系的にかつ良好な状態で残していくための環境をつくっていく役割も、図書館にとっては重要になってくると思います。

図書館をワクワクする場所に

——新図書館計画を進めるにあたり、東大生に対して期待していることはなんでしょうか？

久留島　ライブラリープラザには新しい知を生み出す様々な仕掛けが用意されます。その場に参加した人たちが能動的に関わって影響し合うときこそ、本当に新しいものが波紋のように次々と生まれてくるのだと思います。学生たちにはぜひとも「ワクワクするものを生み出そう」という姿勢で図書館に関わってもらえたら嬉しいです。

堀　いいものをつくるには、自分たちがつくりたいと思うもの、欲しいものを追求していく姿勢が重要だと思います。学生や図書館に関わる人たちみんなが楽しんでやっていることが、新図書館という場で花開いていくといいですね。

新図書館
ACS
Academic Commons Supporter

アカデミックコモンズサポーター（ACS）は、東大図書館の未来の姿を提案する学生ボランティア組織です。学部生から院生まで、分野も様々な学生が出会うことで、幅広い視点からのアイディアが生まれています。ACSに関心がある方は、新図書館計画ウェブサイトACSページをご覧ください。

http://new.lib.u-tokyo.ac.jp/acs

ACS の活動

教育との連携

大学院生が自分の研究分野についてミニレクチャを行うイベントを開催しました。双方向的な授業設計を学んだ、東京大学フューチャーファカルティプログラム（FFP）の修了生が講師を務めました。

第５回ミニレクチャプログラム（2015 年 12 月開催）

新図書館計画の広報

新図書館計画関係者へのインタビュー記事 Web 公開、本誌「図書館の窓増刊 New Library Project」の編集に携わり、現状の計画を広く、学生に分かりやすく発信しています。

新図書館計画ウェブサイト ACS ページ

他大学との交流

近年、全国的に活発になっている図書館と学生の協働活動。他大学の学生協働に関わる学生スタッフとの交流・情報交換を通じて、ACS の活動もますます活性化しています。

学生協働ワークショップ（2015 年 9 月、早稲田大学）

新図書館が目指す5つのコト

ここまで見てきたように、新図書館計画によって様々な施設、設備、サービスが展開され、東京大学附属図書館は未来の「知」を支える新たな拠点となっていく。このコラムでは、新図書館が目指す5つの理念を紹介する。

Vision 1

【ハイブリッド図書館】
伝統と未来が融合した、新しい図書館のかたちを示す。

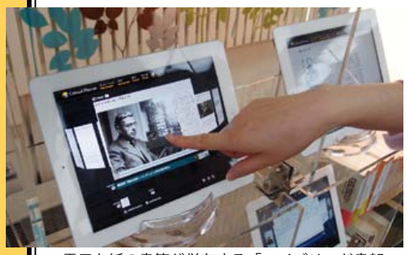
デジタル革命は、グーテンベルク以来の大革命だ。近い未来、本や雑誌、新聞といった旧来のメディアで得られていた情報が、すべてディスプレイ越しに手に入れられるようになるとしたら、私たちはどのように知と出会っていくのだろうか。

図書館には先人たちにより膨大な時間をかけて編まれてきた知の体系が静かに息づいている。暗い書庫の奥深く、光の射さない場所に。けれど、誰かがひとたびページを開けば、それは生き生きと輝きはじめ、知のよろこびを伝えてくれるだろう。本は開かれるのを待っている。

新図書館計画では、東京大学の持つ膨大な知を、電子化時代にどのように活かしていくかを検討している。「ハイブリッド図書館」構想だ。私たちは、図書館の長い伝統と、デジタル技術により可能となった電子図書館という新たな形態とを融合させた、ハイブリッドな図書館を目指す。

電子とは、単に「紙」が「デジタル」に置き換わっただけではなく、またハイブリッド図書館とは、単に紙と電子的資料をそれぞれ所蔵しているというだけのものではないはずだ。電子化時代の新しい「読書」とは何なのか、本や情報をどのように探すのか、検索システムはどのようなものが適しているか、図書館の持つ情報と東京大学の持つ他の学術情報はどのようにつながりうるのか。様々な検討が始まっている。

新図書館は、ハイブリッド図書館として、様々な学術情報を結びつけ、知をつむぎだせる場として、東京大学の新たな知の拠点となることを目指している。


電子と紙の書籍が併存する「ハイブリッド書架」制作実証実験を行っている

Vision 2

【国際化時代の教育を支える図書館】
新館地下1階のライブラリープラザ（仮称）。学びと研究をつなぐ。

「能動的学習（アクティブ・ラーニング）」という、教育分野のトレンドワードがある。グローバル化、多様化する社会で活躍できる力が求められる中、従来的な学び、知識をインプットするだけの受動的な学びではなく、自ら課題を発見し、主体的に考えていく学びが重要とされている。

主体性、自律性――いや、もちろん、東大生諸君にはもともと備わっているものかもしれない！ キャンパスを歩けば、学部や学科のラウンジで、教室で、食堂で、カフェで、友人や先輩と議論し、学びを深めている姿をそこここで目にする。

そうした学びをさらに促進するのが、新図書館のコンセプトのひとつである。学びのための様々なツール、すなわち本や雑誌、電子リソースなどの情報資源、ホワイトボードやプロジェクタといった設備、わからないことを気軽に聞けるTAやライブラリアンといった人的資源が手に入る、居心地のよい快適な空間。教育改革が進められる中で、新図書館は、東大生の学びを支える中心的な場所となる。

さらにそこでは、高度な知に触れ、「研究」と出会える場となることが企図されている。様々な分野の学生や研究者が集い、研究発表や多様なディスカッションが同じ場所で行われることによって、そこに参加する誰にとっても刺激のある空間が生まれることだろう。

ライブラリープラザ（仮称）では多様な学習スタイルが可能だ（写真はイメージ）

Vision 3

【アジア研究図書館】
本館4階に世界水準のアジア研究拠点を。

東京大学の数多くの図書館・図書室・研究室には膨大な資料が所蔵されているが、中でも「アジア」に関わる資料は、質量ともに世界に誇りうるものである。その資料を集め、また結びつけ、すぐれた研究機能を持つ世界水準のアジア研究の一大拠点を築く。それが「アジア研究図書館」計画だ。

そもそも「アジア」とは何で、どこなのか。アジア研究図書館の最初の大きな問いだ。例えば北アフリカ、スペイン、サハラ以南は「アジア」か否か……？

東京大学では、地理的な「アジア」の枠にしばられず、問題系としての「アジア」を幅広く考える研究図書館を目指している。それは「アジアでない何か」を切り落とすものではなく、「アジア」から世界を広く捉えるものになるはずだ。「アジア」というタームのもとに、多様な学問分野が結びつき、行き交う。新しい知の空間である。

豊富な蔵書の「紙」の力に、数多くの研究者の「人」の力と、新しい「デジタル」の力が結びつくことで出現する世界水準のアジア研究環境に、国内外の研究者が集い、新たな輪が広がっていく。アジア研究図書館は、東京大学の特徴のひとつ〈知の顔立ち〉を示すものとなっていくことだろう。

総合図書館所蔵のチベット語経典「聖七如来往昔本願殊勝大乗経」

朝鮮の古地図を調査する本学研究スタッフ

Vision 4

【社会にひらく図書館】
そこに行けば何かが起こる、多様な人や「知」の集まる場所へ。

新図書館計画では、本郷キャンパスのロケーションを活かし、上野・本郷地区を結んで文化芸術施設と連携していこうとする取り組みが検討されている。それにより、日本の学術・芸術文化を世界に発信していこうというものである。例えば、上野地区の施設とともに文化的なプログラムを組織したり、アーカイブを相互接続したり、協働で企画を行うなど、可能性は幅広い。

知的な交流が行われ、知的な刺激が受けられる図書館を、私たちは目指している。

東京大学の知を社会にひらくことにより、多様な人々が図書館を訪れるようになる。そのことが一方で、学生や研究者にも新たな刺激を与える。そしてそこから新たな発見が、新たな知が生み出される。――このような循環が可能なのではないか？ 私たちはそう考え、新図書館の完成に先立ち、「新図書館トークイベント」など、知的対話の場を企画している。

多様なアイディア、知や人との出会い、つながりを可能にする図書館。そこに行けば何かが起こる、そんな期待を抱かれるような図書館を目指して、新図書館は取り組みを進める。出会いの場としての図書館、乞うご期待。

谷川俊太郎氏を迎えて行われた文学インタヴュー（新図書館トークイベント EXTRA）

Vision 5

【出版文化を支える図書館】
新館地下には巨大な自動化書庫。紙の本や雑誌を保管する意義とは？

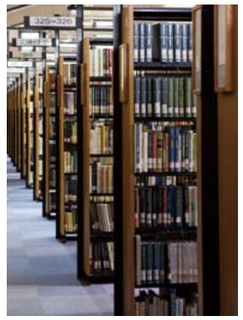
多くの研究は論文の形で発表される。耳タコかもしれないが、論文を書くとき大切なのは、他人の意見と、自分の意見をきちんと分けることだ。他人の意見を知らなければ、くら独創的な意見でも独りよがりになってしまう。

つまり、「巨人の肩の上に立つ」、その分野の膨大な先行研究に学び、それらを踏まえて新たな知見を示すことが求められている。学問は先人たちの知の体系の上に成り立っている。

学術出版文化は、こうした知の体系を支えるものである。研究成果は本や雑誌の形で出版され、それを踏まえて次の研究者が新たな知を創造する。知が生み出される循環の中には、出版というプロセスがつねに存在してきたのだ。そして、出版プロセスの核となる編集プロセスは、典拠の正確性を担保するものでもある。編集者たちはそのために、過去の学術書をひもとく。

電子化が進む中で、改変不可能な固定された形で「知の厳密性」を担保しておくことは重要だ。すなわち、どこかで誰かが、原典を保存しておくことが必要となる。

新図書館は、新たに建設する地下自動化書庫に大量の紙の本や雑誌を収蔵する。このことは、出版文化の下支えとなり、ひいては学術文化を発展させることになるだろう。


長い歴史の中で蓄積された紙の本や雑誌を保管し、「知の厳密性」を担保する

illustration：しらいゆうこ

マンガで知ろう!

あなたのための 図書館サービス

東大図書館には、あなたの学びを手助けする
便利なサービスが盛りだくさん。使わないなんてもったいない!
なかでもイチオシの図書館サービスをご紹介します。

入学したばかりの1年生。図書館はたまにしか行かない。

レポート提出を目前に控えた悩める2年生。

図書館ならお任せ!な4年生。中の人より図書館に詳しいとの噂。

図書館だってつながります

utroam のアカウントを取得すると、キャンパスに持ち込んだタブレットやノートパソコンでインターネットが使えます。学内ネットワークにつながるので、各種データベースにアクセスする煩雑な手続きが不要です。
http://utroam.nc.u-tokyo.ac.jp/
（学内アクセス限定）

文献検索でつまずいたら

マンツーマンの相談の他に、文献検索やデータベースの利用方法を学ぶ講習会もあります。オーダーメイドにも対応!
http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html

カウンターはちょっと…な方には、Web 上の ASK がおすすめ。いつでも、どこからでも質問できます。
https://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ask/

ネットで本を取り寄せよう

MyOPACを使えば、学内外から資料の取り寄せが可能。また、開館日や図書館で開催されるイベントの案内、予約・延滞中の資料まで一目で分かります。他にも便利なサービスがたくさん。今すぐ使ってみよう!
https://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/myopac/

学外から電子ジャーナルやデータベースにアクセスしよう!

SSL-VPN Gateway サービスを使えば、
学内ネットワークのみで利用可能な
電子ジャーナルなどに、自宅など学外からもアクセス
できるようになります。（一部除く）

何が必要なの?

学生共通アカウント（ECCS 新規利用者講習会受講済み）が必要です。サービスの利用方法については、Web サイトをご確認ください。

http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/faq/gakugai.html

卒業後も東大図書館を使おう!

東京大学の学部を卒業された方、
大学院を修了された方は
「東京大学附属図書館入館証」を持つことができます。

「東京大学附属図書館入館証」で何ができるの?

「入館証」は全学共通で、総合図書館・駒場図書館・柏図書館・医学図書館・農学生命科学図書館・文学部 3 号館図書室への入館が可能です。サービス内容や手続きの方法など、詳細は Web サイトをご確認ください。
*「入館証」で貸出サービスは受けられません。

http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sogoto/contents/alumni.html

図書館のジュニアTAになろう!

東京大学には、大学の様々な活動に
学生が積極的に参画することを奨励するために、
意欲ある学部学生（一部大学院学生を含む）を
「ジュニア・ティーチング・アシスタント」（略称ジュニアTA）
に任命し、奨励金を支給する制度があります。
ジュニア TA になって、もっと図書館と関わってみませんか?
募集時期など、詳しくは各図書館・室でお尋ねください!

図書館で何をするの?

代表的なのは、返本作業や書架整理、図書の選定、蔵書点検ですが、他にも多様な業務があります。期間も、短期（長期休暇中の 1 ～ 2 週間など）や長期（週 1 回 2 時間の勤務が半年など）と募集によって異なります。

ジュニア TA 経験者の声

文学部生
（主な業務：返本、選書
@総合図書館）

自分では手に取らないジャンルの本にも出会えるのが面白いです。キャンパス内で働けるのも便利ですね。

教養学部生
（主な業務：蔵書点検、
図書館ツアー案内@駒場図書館）

図書館の普段入れない場所に立ち入ったほか、図書館業務に携わることができたのはよい経験になりました。

※このページで紹介するサービスは学生向けのものです。また、内容は 2016 年 3 月現在のものです。

図書館の窓 増刊 New Library Project 2016年3月11日 第2版発行 発行人：尾城孝一 発行：東京大学附属図書館 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

おしえて図書館！

クスノキはどこへ？

Q クスノキはどこへ？

A 総合図書館前広場は現在工事中ですが、以前は、見事な枝ぶりの2本の巨大なクスノキがありました。今はなきクスノキは、どこへ？伐採された？いいえ、ご安心ください。東京大学の重要な資産ということで、本郷キャンパス内に移植されたのです。

移植作業中のクスノキ

2012年6月11日から29日にかけて行われた大がかりな作業の末、総重量50～80トンにも及ぶ大木のクスノキは、医学部2号館前広場に無事、移植されました。移植後の活着を容易にするために、移植の1年ほど前に太根を切断し、埋め戻して切断部付近に細根の生育を促すとともに（これがまさに「根回し」です）、木の生命力をいったん弱めるために枝を大胆に落とすなどの入念な準備が行われました。

今では、新天地にすっかり根付き、枝ぶりも少しずつ戻りつつあります。クスノキ跡地に建設される新図書館の地下空間も、東京大学の知に少しずつ根を広げていくことでしょう。

UTokyo Libraries in numbers
数字で見る東大図書館

学内に 35 の図書館・室

附属図書館は、総合図書館、駒場図書館、柏図書館の3つのキャンパス拠点図書館と、学部や研究所の専門分野に対応した32の部局図書館・室が作るネットワークです。学習・教育・研究の身近な拠点として、東京大学の多様な知を支えています。

蔵書数

9,446,965 冊（2014年度）

東京大学の歴史とともに蓄積されてきた蔵書の数。国立国会図書館に次いで国内2位の規模を誇ります。

電子ジャーナル

28,885 タイトル（2014年度）

アクセス可能な電子ジャーナルタイトル数。電子ジャーナルは、今や研究活動に必須のインフラとなっています。多くのジャーナルにアクセスできる環境を整えています。

ご寄付のお願い

新図書館計画では、みなさまのご寄付を募っています。このプロジェクトは、東京大学の知を集積・創造・発信する新たな知の拠点を作ろうという非常に大規模なものであり、多額の建設経費が必要です。また高度化した新図書館の機能を支えていくためには、相当額の運営費が必要となります。

このため、東京大学ではプロジェクト推進のための基金を設けました。

世界に開かれた東京大学の知を受け継ぎ、さらに発展させるという「夢」の実現に向けて、ぜひご理解とご協力をお願いいたします。特別利用証やお名前の入った銘板などの特典もあります。

総合図書館特別利用証サンプル

詳細については http://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt31.html をご覧ください。

監修
久留島 典子（附属図書館長）
堀 浩一（附属図書館副館長）

プロデューサー
阿部 卓也（新図書館計画推進室・特任講師）

編集長
中山 昌也（法学部研究室図書室・p2-5 執筆）

副編集長
立原 ゆり（農学生命科学図書館・p14-15 執筆）

第2版 改定作業統括
大谷 智哉（総合図書館・p12-13 執筆）
田口 忠祐（農学生命科学図書館）

編集スタッフ
谷島 貫太（新図書館計画推進室・特任研究員）
牧 美穂子（法学部研究室図書室・p6-7 執筆）
白石 慈（薬学図書館・p8-9 執筆）
守屋 文葉（総合図書館・p10-11 執筆）
並木 映李香（総合図書館・p10-13 執筆）
秦野 寛子（総合図書館・p10-11 執筆）
松原 恵（駒場図書館・p16-17 執筆）
永友 敦子（医科学研究所図書室・p18-19 執筆）
鈴木 祐介（総合図書館・p20 執筆）
小野寺 咲紀（医学図書館・p14-15 執筆）
楳原 衣恵（情報システム部・p14-15 執筆）

学生スタッフ
東京大学 新図書館計画学生サポーター
（アカデミックコモンズサポーター（ACS））
清重 亜由子（教養学部・企画 / 編集 / 撮影協力）
横澤 直人（教養学部・企画 / 撮影協力）
佐藤 太一（経済学部・取材 / 撮影協力）
吉田 健人（理学系研究科・取材 / 撮影協力）
吉田 昱（新領域創成科学研究科・取材 / 撮影協力）
渡邉 智彦（人文社会系研究科・取材 / 撮影協力）
幸田 理恵（農学生命科学研究科・取材 / 撮影協力）
若林 智章（新領域創成科学研究科・撮影協力）

Special Thanks
川添 善行（生産技術研究所・准教授）
冨澤 かな（アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）・特任准教授）
岩谷 舟真（人文社会系研究科）
成澤 めぐみ（総合図書館）
松浦 友紀子（総合図書館）
古島 唯（総合図書館）

東京大学新図書館計画
（Webサイト）http://new.lib.u-tokyo.ac.jp/
（Facebook）https://www.facebook.com/UTokyoNewLibrary
（twitter）https://twitter.com/UTokyoNewLib

企画
東京大学 新図書館計画学生サポーター
（アカデミックコモンズサポーター（ACS））

企画制作
東京大学附属図書館
新図書館計画推進室 職員課題検討グループ

共同制作
東京大学附属図書館 広報委員会

アートディレクション・デザイン
白井 瑞器（branco-design）

印刷
（株）平河工業社

© 本紙記事の無断転載を固く禁じます。

※スタッフの所属は本パンフレット制作に関わった当時のものです。

発行人 尾城孝一（附属図書館事務部長） 2016年3月11日 第2版発行
発 行 東京大学附属図書館 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 電話：03（5841）2612 Email：kikaku@lib.u-tokyo.ac.jp